

# ひとつの平泉澄像

若井 敏明

## はじめに

一九一五年十二月一日、その年九月に入學した新入生歓迎を兼ねて開かれた東京帝国大学文科大学国史学科の国史談話会の席上、教授・先輩の講演のあと、一人の学生が新入生の挨拶もかねて自らの研究を発表するという出来事があった。その内容は「越前国の郡分が乱れたるは延喜式の後間もなきの論」と「平泉寺の記録より推したる天海の名の起源の論」で（『史学雑誌』26—12）、とくに後者については辻善之助も初耳の研究があり、辻との間で問答が交わされたという（『歴史地理』27—1）。『歴史地理』の記者は、この一学生にたいして「吾人は謹んで君の前途を祝福せんとす」と記した。この新入生こそ、のちに中世史において優れた業績をあげながら、やがて「皇国史観」のアジテーターに変貌した平泉澄（一八九五—一九八四）である。

平泉澄は戦後歴史学で否定的な評価をうけ、戦時中の行動

が語られることはあっても「学問の歴史に名をとどめていない」と評されてきたが、近年今谷明氏がいくつかの論考を発表されて以降、ようやく史学史の本格的な対象となりつつある。そこで本稿では、私自身の本格的な平泉澄論の前提として、彼が変貌したとされる一九三〇年代初頭までの軌跡を追う、私なりの平泉澄像を提示して諸賢の批判を仰ぐこととしたい。なおそのような性格上、本稿では評伝的ないし史料紹介的な叙述の多いことをお詫わりしておきたい。

## 一 新進史学者の登場

本節ではまず平泉澄が新進気鋭の史学者として世にあらわれるまでを略述することとしたい。

平泉澄の歴史へ興味は少年時代にさかのぼる。晩年の一九八〇年に刊行された自伝『悲劇縦走』によれば、一九〇七年に大野中学校（現・福井県立大野高校）に入學した際に叔父の島田毅一から譲られた『神皇正統記』は彼の愛読書であっ

たし、博文館の日本文学全書を「むさぼり読んだ」<sup>③</sup>のも中学生の時であった。さらに史書や古典に親しむばかりでなく、一六、七歳のころ（一九一〇、一一一年）には歴史の考証にも興味を抱くようになったが<sup>④</sup>、そのフィールドは、彼が生まれた福井県大野郡（現・勝山市）の平泉寺白山神社関係の歴史であった。すなわち、一九一二年早春には『白山神史』を著し、同年秋の第四高等学校入学後も、一九一三年には『白山平泉寺史』をまとめ<sup>⑤</sup>、一九一五年には家蔵の『泰澄和尚伝記』を牧野信之助所蔵の写本と対校している。また四高在学中の一九一四年に歴史地理学会へ入会し（『歴史地理』24―2、24―4）、『歴史地理』も講読していた。このように、平泉はすでに大学入学前からすくなくともひとかどの郷土史家の域に達していたのである。

さて、入学当初から抜きんできていた平泉は、東大在学中にも多才な活動をみせる。まず一九一六年九月の史学会評議員会で同会の学生委員に任じられ卒業までその任にあった。また、この年十一月十五日の歴史地理学会例会での「越前南條と美濃郡上との史的相関」についての報告（『歴史地理』28―6）をもとに「郡上と穴馬」を執筆、翌年『歴史地理』29―1、4、5に発表した。この論文の巻頭に「くちなしの花五月雨になげかへる頃、我始めて郡上と穴馬を訪ひ（略）史料

の探訪に従ひぬ」とみえ、一九一六年の初夏に同地を訪れたらしいが、末尾に「我等のささやかなる旅行にも幾多の便宜を与えられたる恩師三上先生」とあるので三上参次が便宜をはかったらしい。それ以降も論文や書評を発表し、さらに一九一七年十一月の読史会例会で「中世に於ける兵農僧の区別」と題して中世末期に武士と農民、僧侶が混濁する傾向にあったことを論じた「講話」も行い（『史学雑誌』28―12）、やがて一九一八年七月に「中世に於ける社寺の社会的活動」という題目の卒業論文で東京帝国大学国史学科を首席で卒業（『史学雑誌』29―8）、卒業後は大学院で研究を継続した。なお卒業の際、三上参次が平泉を史料編纂掛に採用しようとしたが黒板勝美が反対したことがあったという<sup>⑦</sup>。先にみたように三上はなにかと平泉に便宜を与えており、実証史学者としての平泉に期待するところが大きかったらしいが、平泉自身は黒板勝美を恩師と仰ぎ（『悲劇縦走』）、彼を黒板直系とみる人も多い<sup>⑧</sup>。当時、東大国史学科には三上派と黒板派の二派があり、大久保利謙が「平泉先生は最初は三上先生で、それから黒板先生の方に移っています」<sup>⑨</sup>というのはこの辺の事情をさしているであろう。

大学院に入学した一九一八年の秋に、黒板の命令で日光東照宮社史（本編）編纂の主任となり（『悲劇縦走』）、ついで『東照宮史』が完成した一九二二年には帝国学士院の推薦で

東照宮三百年祭記念会の補助金四五〇円（『歴史地理』3812）をうけて五辻宮守良親王の事蹟に関する研究を行い、同じ年に文部省より宗教制度調査を囑託された（『東京帝国大学学術大観』）。これは文部省宗教局での宗教法案制定の準備研究の委員で、彼と相原二郎、荻野仲三郎の三人が任命された（『歴史地理』3812）。

また一九一八年九月の評議員会で史学会委員編纂主任に任命され、一九二〇年九月まで二年間この任にあった。これは『史学雑誌』の編纂にあたる仕事で、この間の彙報欄には彼の執筆になるものが多い（とくに一九一九年の第30編と一九二〇年の第31編）。この時期、彼は一九二〇年四月の史学会大会・国史部会での研究報告による「吉田兼俱の冤罪」（『史学雑誌』317）以外は論文を執筆していないが、編纂主任の座を退いてからは精力的に論文を執筆し、これらの多くは一九二六年発行の論文集『我が歴史観』に収録された。

東照宮や南朝皇子の研究に従事していたものの、平泉の大学院での主要な研究テーマは卒業論文のテーマを引き継いだもので（一九二〇年九月末の時点での研究題目は「社会と寺社との関係」『歴史地理』3716）、この成果は一九二三年春に大学へ提出した論文「中世に於ける社寺と社会との関係」に結実した。これにより彼は一九二六年三月に文学博士の学位を授与され、同じ年に出版されたこの研究は今日でも主に

寺院のアジュールについて本格的に論じた最初の文献として注目されている。

一九二三年三月に荻野由之退官の後をうけて東京帝国大学講師となった平泉は、その年と翌年にかけて、武家時代の精神生活に関する講義と『吾妻鏡』を用いた演習を担当した（『史学雑誌』3515、3615）。このうち「武家時代の精神生活」の講義が一九二六年に刊行された『中世に於ける精神生活』である。なお彼は東大講師就任後の二年間、論文を発表・執筆していない。これはおそらく関東大震災で「従前研究の結果をなせば一炬に付し」、<sup>⑩</sup>当面発表する論文のストックがなくなってしまったことによるのであろう。さらに一九二三年からの講義の教案作成などで単行論文執筆の余裕がなかったこともあげられる。論文こそ発表しなかったが、一九二六年に刊行された『中世に於ける精神生活』が十分この時期の彼の成果を物語っているのである。

この時期の平泉について、一九二三年入学の坂本太郎は『吾妻鏡』の演習に出席してその基本的な読み方を教えられ「よい先生に恵まれたことの幸いを、今にしてつくづく感じる」と述べて平泉を「無類の秀才」と評し、<sup>⑪</sup>一九二六年入学の大久保利謙も「講義は際立っていて、歴史とはこうやるのかと感銘をうけた記憶があります。中世の往来物の成立年代の考証などは実におもしろかった」と回想している。<sup>⑫</sup>

平泉澄がこの時期に発表した『中世に於ける精神生活』  
『中世に於ける社寺と社会との関係』及び『我が歴史観』の  
なかの実証論文、とくに『中世に於ける社寺と社会との関係』  
にみえるアジール論は、今日でも学問的に評価されている。  
それでは、いつごろから平泉は、そのような中世史研究から  
いわゆる「皇国史観」に傾斜していったのであろうか。

## 二 平泉の歴史観

従来から平泉の皇国史観への転換点のひとつとして位置づ  
けられてきたのが、一九二五年四月の史学会例会での講演  
「歴史における実と真」(『史学雑誌』3615、のち論文とし  
て発表)と同年十一月の「我が歴史観」という歴史の方法に  
かんする二論文(ともに『我が歴史観』に収録)である。た  
とえば北山茂夫は、一九二五年のこれらの論文を経て、平泉  
は精神史つまり「史的観念論」に転換し、一九二七年には日  
本精神史観の騎手としての宣言を発し、それはマルクス主義  
への公然たる挑戦であったととらえつつ、東大の内部で彼の  
「呼号」に追随したものはまれで、彼は反発され孤立してい  
たという<sup>⑧</sup>。このうち学内での平泉への評価については先にあ  
げた坂本太郎や大久保利謙の回想から見ても問題があるが、  
それよりも重要なのは、これらの論文から平泉の転換がはじ

まったとする見解である。また平泉の転換を認めない論者で  
も、これらを皇国史観的発想の産物と捉える点では変わらな  
いように思われる<sup>⑨</sup>。

そこで両論文にみえる彼の歴史意識をみてみると、まず  
「歴史における実と真」は、平泉一流の美文調のレトリック  
が溢れているが、つまるところ、実を追求する考証のみでは  
「歴史は精神を失い、真を逸せる空文に過ぎない」ので、分  
析のうえに歴史家による総合がなされねばならず、そのため  
には歴史家の資質が重要であると説くものである。そこにみ  
える分析による科学的研究法を解体すなわち死とし、総合を  
生として「科学よりはむしろ芸術である」という文句などが、  
科学としての歴史を放棄したものとして問題となるが、彼は  
けっして科学的研究を否定しているのではなく、そのうえに  
総合がないと歴史は死滅するといっているのである。

それでは歴史家はいかにして総合を成しうるのか。それを  
論じたのが「我が歴史観」である。そこで彼は「史家は事実  
の中に於て選択を行ひ、特に採用に値し、又採用の必要あり  
とみとめたもののみを記述」し、その選択は「全体の関係よ  
り判断」され、その史実の選択は歴史家が「何を問題として  
るか、全体として何をつかんでるか」、すなわち歴史家  
の問題意識と歴史認識によって判断されるという。この論文  
もそこに盛られている歴史における個人の問題をはじめ、種々

に解釈されているが、その要旨は歴史研究における歴史家の主体性を主張することにあると思う。

このように、「歴史における実と真」と「我が歴史観」で論じられているのは、あくまで歴史学の方法論であり、アカデミズムの範囲を出るものではない。そして、そこで示されたのは、個別の考証にとどまらず、それらを歴史家が主体的に総合していくことを重視するという研究態度であった。彼のこのような見解は、『中世に於ける社寺と社会との関係』序にみえる「歴史がその叙述において如何なる要素をとり、如何なる要素を捨つるかに就いては、その史家のとるところの立場と時代限定の広狭とが、絶えず之を変化せしめる」という文章にすでに窺え、その際「研究の出発点を常に社会に置」くのが史家としての彼の立場であったのである。

彼のこのような歴史観は、さらにさかのぼって一九一九年に発表した津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究 平民文学の時代・上』の書評（『史学雑誌』30—1）に「単に無味乾燥なる履歴書の考証のみに止るならば、史家の現前に現はれ来る古人はひやかかなる機械的存在に過ぎない」という一節としてみえている。そこで彼は、従来の歴史が「社会の上流に篤くし一般国民の生活に薄かったこと」と「外的生活を主としてその内的生活にふるる事の少なかつた」ことを遺憾とし、「我等は広汎なる多方面にわたって、我が

国民の実生活を研究し、更にその内的生活に浸透して国民思想の特質、時代精神の推移を洞察しなければならぬ」という。ここに述べられた「実生活の研究と国民思想の特質、時代精神の推移の洞察」は『中世に於ける社寺と社会との関係』序に窺える社会を重視した彼の立場に対応し、彼の一貫した研究姿勢であったことは明白である。すなわち、彼は大学院時代から、すでにかかる歴史意識にもとづいて中世社会の研究を行っていたのであって、初期の諸論文や『中世に於ける社寺と社会との関係』、『中世に於ける精神生活』は、かかる研究態度による中世社会研究の成果なのである。

このように、平泉は一九二五年になって「歴史における実と真」と「我が歴史観」にみえる見解に到達したのではなく、すでに大学院時代からそのような問題関心で歴史に取り組んでいた。両論文はそれを一般的な歴史論に発展させたものであり、北山茂夫のいうような彼にとっての「転換」を意味するものではないし、後年の皇國史観に直結するものでもない。むしろそれらは『中世に於ける社寺と社会との関係』をはじめとする初期の業績を生み出した歴史観なのである。

さらに平泉は、一九二六年五月十日付『帝国大学新聞』の「著者の立場から 総合組織と新説」において、自著『中世に於ける精神生活』を「中世に流るる種々の感情思想を、明白なる条理によって組織する事は、未だ曾て試みられなかつ

た所」と自負しつつ、中世という時代区分について「単に政権の推移や、社会表面の出来事のみを取扱はず、深く国民生活の淵底を探り、その基調について考察するならば（中略）上代中世近世と区画する事が、歴史の眞の把握のために最も適当であると思ふ。しかしそれは猶今後の研究発表を待って、次第に明らかにされるであらう」と述べている。これは平泉が、精神史のみならず生活史をも射程に入れて、ひきつづき中世という時代を総合的に把握しようとしていたことを示すものにほかならない。しかも彼が「中世人は近世人とは異なった価値判断をなし、異なった理想をもち、従ってその目的に到達せんが為に異なった努力をなし、一言にしていへば、異なった世界に住んでゐたのである」というとき、それは現代歴史学でいう社会史の発想に近いといえよう。

平泉澄がその後も中世の総合的把握という観点に立った研究を継続していたことは、同様の問題関心にもとづく論文をひきつづき発表していることから窺える。まず「厭世詩人蓮禪」（一九二五年執筆）は、十年前に執筆したものが関東大震災で焼失したのを、記憶をたどって再執筆したというから、震災前からの課題とみてよい。また「溪嵐拾葉集と中世の宗教思想」（一九二六年執筆）も、十年以前より注意してきた「溪嵐拾葉集」の写本を見る機会をえて執筆されたもので、従来の問題関心を引き継ぐものである。また一九二七年

に発表された神仏習合や分離、神社の座にかんする論文についても、神社の座は「中世に於ける社寺と社会との関係」でその考察を「別の機会に譲」と述べており、神仏習合も従来の研究を受け継いだテーマであらうし、神仏分離の研究は「中世に於ける精神生活」の末尾で「更に筆端を改めて之を論述する事としやう」と述べた中世から近世への移行に関係している。さらに一九三二年に発表した「北畠親房の古今集註」も同書で「いづれ詳論する機会があるであらう」と述べているテーマである。

また東大での平泉の講義・演習は、『史学雑誌』の記事によれば、一九二五年度には保元以降の中世史の講義と鎌倉南北朝時代の記録の演習、さらに助教授となった一九二六年度は保元以降の中世史の講義と『園太暦』、『吾妻鏡』の演習、一九二七年度は中世史前期の講義と『後法興院記』、『吾妻鏡』の演習、一九二八年度は建武中興の中世史と『後法興院記』、『吾妻鏡』の演習、一九二九年度は中世史（主として社会生活）と建武中興そして演習であった。これを見ると、中世史の講義は保元から順を追って建武中興に至り、新たに社会生活史にも及んでいた。その内容の詳細は不明だが、一九二九年入学の豊田武が彼の建武中興の講義を今井登志喜の英国社会史とともに面白かったと回想しているから<sup>16</sup>、学問的にも興味のあるものであったのであらう。ここからもまたこの時期

の彼の研究動向が窺えるのである。

以上から明らかなように、平泉澄は大学院時代から一貫して、個別実証にとどまらず、それらを総合して「深く(中世の)国民生活の淵底を探り、その基調について考察」する研究姿勢を示していた<sup>⑩</sup>。しかし、これらの研究は結局集成されることなく、いわば未完成のまま放置され、平泉自身は学問的な歴史研究とは別の教化的な史論を展開して、やがてその方向に埋没していったのである。このように考えれば、彼がその方法論において北山茂夫のいう「史的観念論」に立脚したこと自体はなんら問題とはならないであろう。これは「史的唯物論」の方法をもって唯一の科学的方法と過信した時代の発想である。むしろ我々は平泉の中世史がついに未完成に終わったことを、日本中世史のみならず近代日本の歴史学にとつての大きな損失として惜しむべきであろう。ただし、平泉の中世史像についてはそれだけで独立した研究課題であるから本稿では触れず、平泉が中世的世界の探究を放棄した事情をつぎに検討していくこととしたい。

### 三 国粹主義的傾向の萌芽

前節で述べたように、平泉澄は一九二六年以降も中世を全体的に捉える研究に従事していたが、その一方でやや異なっ

た傾向がみえてきたのも事実である。たとえば、一九三二年刊行の第二論文集『国史学の骨髄』に収録された論文十二編を執筆年代順に記すと以下のようだが、それらには学術的・準学術的作品以外に時局がらみの史論が含まれている。

一九二六年 溪嵐拾葉集と中世の宗教思想、歴史の回顧と革新の力

一九二七年 国史学の骨髄

一九二八年 歴史を貫く冥々の力、日本精神発展の段階、

中世文化の基調、一の精神を缺く、国家護持の

精神

一九二九年 栗山潜鋒と谷秦山、飛鳥時代の文化、江都督

納言願文集発刊の由来

一九三〇年 日本精神

これをみれば、中世史家平泉澄に歴史を材料としながら国家主義的な精神論を唱える時局家という新しい側面が加わった観がする。従来その転換点といわれてきた「歴史に於ける真と実」や「我が歴史観」が、大学院時代の彼の研究態度につながることはすでに述べた。では平泉にかかると変化をもたらしたものは一体なんだったのであろうか。

彼が教化的に歴史を論じたのは、一九二六年の「歴史の回顧と革新の力」が最初であろう。これは歴史地理学会での「国史と回顧」と題した講演(『歴史地理』48-4)をもとに

したもので、大化改新や建武中興などを素材にして歴史を回顧することが革新につながることを述べている。ついで一九二七年の「国史学の骨髄」では、歴史の変化発展を把握する上での時代区分の重要性を述べる一方、歴史への回顧がさらに強調される。すなわち、歴史が成立するためには現代人の認識力によって過去の崇高な人格、偉大な功業を復活させねばならず、それは自国の歴史（国史）においてのみ可能であるが、革命によって伝統が切断された国ではかかる意味での歴史は成立せず、日本においてこそそれが可能だという。この歴史の回顧の重視は、やがて古人の精神を現在に復活させようという後年の彼に一貫した主張となる。

このような史論の展開は、「我が歴史観」などにみえる歴史における個人の役割を重視し、個人の業績を追求する彼の研究姿勢に由来するものであろう。しかし、人は自分の思想を補強する目的で過去から任意に個人を選択することができるから、そのような研究姿勢がただちにいわゆる「皇国史観」には直結しない。彼が歴史上の個人を論じて国粹主義的思想を喧伝したのは、その歴史学の方法に由来するのではなく彼の思想そのものによるのである。

平泉が大学院時代から天皇中心主義的ないし国粹主義的思想の持ち主であったことは、この時期に編纂にたずさわった『東照宮史』で皇室を「我が民族団結の源泉であり中心」と

述べていることや、一九二〇年の森戸事件の際には学内の右翼団体、興国同志会の会員として森戸追放に「活躍」していること<sup>⑧</sup>から明らかであるが、その傾向は中学時代からみられた。彼自身、当時の大逆事件による衝撃を回想して「身を以てこの凶悪思想を喰止めねばならないと考へ（略）一生を之に捧げようと志すに至った」と述べており<sup>⑨</sup>、その衝撃から一九一一年十一月には、友人の十時（のち内山）進と「青年」が指導ノ任ニ当ルモノハ、宜シク大義名分ヲ明ニシ、皇国ノ道義ヲ説キ、一意専心、之ヲ善ニ導クベキナリ（略）先生若シ俊秀ノ子弟ヲ養成セン事ヲ期シ給ハバ、冀クハ〇〇〇〇ヲ学校ヨリ除去シ給ハン事ヲ」という意見書を校長に提出している（『悲劇縦走』）<sup>⑩</sup>。

このように、彼の国粹主義的思想は少年時代からほぼ一貫しており、その後の彼の歴史研究の所産ではない。その点を重視すれば、今谷明氏のように、平泉の大正期の実証主義的な研究は世間・学界の目をくまますための「猫かぶり」であった、学的名声を獲得したのは「仮面をぬいで地金をあらわした」<sup>⑪</sup>ともいえない。しかしながら、それだけでは、彼の学風の変化がこの時期におこった理由や後に述べる欧米視察後の一層の変化などの疑問には直接答えたことにはならないと思われる。

そこで、この時期の平泉の学風変化との関連で注目すべき

が、「国史学の骨髄」のなかで彼が『神皇正統記』にみる歴史の復活に論及していることである。彼が一九二六年ごろには『神皇正統記』の研究に着手していたことは、同年にその写本を求めて水戸の六蔵寺を訪れていること<sup>⑧</sup>から明らかである。彼は大学赴任後、本格的に史料の校訂や研究に取り組みはじめ、たとえば一九二六年からは『後法興院記』の校訂作業を行い一九三〇年に出版している。そのような史料研究の対象として、少年期より関心のあった『神皇正統記』を取り上げたのは自然である。

平泉が『神皇正統記』について論じた最初の論文は、一九二七年発行の『日本文学講座』に執筆した「神皇正統記研究」である<sup>⑨</sup>。彼はここでこの書の特徴として中世に一般的であった仏教の影響を受けていないことをあげ、「純日本の魂により、建国の精神を復活し、神道の思想によりて、仏説の惑溺を斥け、正義によりて実益を打つ」歴史書であるという。中世が仏教思想の支配した時代であったという平泉の理解を踏まえれば、『神皇正統記』とは中世を否定し、上代の精神に照応し、下って明治維新を喚起する書となる。そこを貫徹するのが、時代を通じて変わらない建国の精神すなわち「日本精神」にはかならない。

ところで、この時期『神皇正統記』とならんで平泉がしばしば言及しているのが近世の勤王家である。管見でのその最

初のものは、一九二六年十月七日の景岳会主催・左内先生講演会での「景岳先生について」と題した講演である。ただし、この講演の趣旨は、講演筆記(『史学雑誌』37-11)をみると、橋本景岳(左内)の生涯を叙述し、とくにその思想の先見性を主張するにあつたようである。景岳会は橋本左内の郷里福井県出身者の育英機関・輔仁会内を事務所として一九〇二年に設立された左内を顕彰する団体で、関東大震災のあと活動不振に陥っていたが、輔仁会学舎の監督に就任した平泉が一九二六年に幹事に就任し「鋭意之れが頹運を挽回せんことを図」り、積極的な活動を行った<sup>⑩</sup>。この景岳会での活動を通じて、平泉は橋本左内をはじめとする勤王家に関心を示すようになってきたらしい。景岳会以外でも一九二八年十二月の海軍・有終会での講演「歴史を貫く冥々の力」では、福井出身の歌人橋曙覧にふれ、左内や曙覧の憂国の情は福井藩の漢学者吉田東篁に基づき、その源流は山崎闇斎にあると述べ、このような講演はさらに一九二九年秋の安政大獄志士七十年記念講演会での講演(『武士道の復活』に「橋本左内先生とその周囲」と題して収録)や、一九三〇年三月の海軍大学校での橋曙覧についての講演へとつづくのである。

平泉の近世勤王家への関心は、中学三年の時に藤田東湖全集を求めて読み、また中学の終りごろに橋本景岳(左内)全

集に感銘を受けた<sup>⑧</sup>ころにさかのぼり、山崎闇齋学派への興味も「学生時代、もしくは大学を卒業した直後、上野の文行堂において若林強斎の『雑話筆記』を求め」た時にはじまる<sup>⑨</sup>というが、一九二一年八月に東篁門下の杉田定一が平泉寺へ来たときも「特にこれと云ふお話もうかがふ事も無く終」った<sup>⑩</sup>（『悲劇縦走』）から、吉田東篁などに当初から関心があったかどうかは疑問である。平泉自身は彼が輔仁会の理事・舎監となつてから会長の八田裕二郎から吉田東篁について知らされたという（『悲劇縦走』）。これは大久保利謙が一九二八年頃に平泉が「小石川の方の金富町というところにある福井県の学生寮の舎監みたいなことをして」た<sup>⑪</sup>というのに該当する。『史学雑誌』一九二五年十一月の会員名簿に彼の住所が小石川・金富町とみえ、同年中にはここに転居したらしいので、輔仁会の舎監となつたのもこの年のことであろう。そして翌年には景岳会幹事となるのである。したがって、彼が吉田東篁や山崎闇齋に傾倒していくのは、一九二五年以降おそらくは景岳会に関与するようになってからであろう。

このような近世の勤王家への傾倒による彼の学風の変化と、先にみた『神皇正統記』の位置づけとを総合すれば、ここに上代から建武中興そして近世の勤王家をへて明治維新にいたる「日本精神」の脈略がたどられることとなる<sup>⑫</sup>。私はこの時

期に、平泉の国粹主義的思想がこのような形で「理論化」されていったと推測する。一九二九年の「日本史上より観た明治維新」（史学大編『明治維新史研究』）において彼は、明治維新の思想的原動力としてとくに崎門学派から発した勤王思想に注意し、それらに与えた建武中興の影響を論じ維新が革命でないことを力説するが、この論文は彼の「理論化」のひとつの到達点であろう。以上の検討から、一九二六年からの『神皇正統記』研究と近世勤王家への興味が相互に関連して平泉の国粹主義的思想の「理論化」がなされ、そこで見いだされた「日本精神」の脈略が後年の彼の活動の基調となつていくという見通しが得られたのである。

さらにもうひとつ注目しておきたいのは、平泉が執筆して一九二八年に刊行されたアルス・日本児童文庫『日本歴史物語・中』である。そこには彼の中世社会史研究の成果はほとんどみられず、後年の『少年日本史』の原型ともいえるような人物中心の国定教科書的歴史叙述に終始している。これは同書が児童向きの書物であることもあろうが、彼が歴史学の研究とは別に、一般国民への教育・教化では当時正統的であった国体史観のスタンスをとっていたことを示している。やがて、彼においては研究と教育・教化の区別は失われ、研究は国体史観による教育・教化に従属していくのである。

このように、一九二〇年代後半の平泉の活動や成果には、

後年の彼の姿勢につながっていく要素がまとめられる。しかし、すでにみたように同時期に彼は『中世における精神生活』以来の課題にも取り組んでおり、ここでは中世史家の平泉澄と「日本精神」を論じる時局家・教育家としての平泉澄はまだ微妙なバランスをとっていたといえる。それでは、そのバランスはいつ崩れるのであろうか。

#### 四 欧米視察の意義

平泉澄は一九三〇年一月に欧米での在外研究を命ぜられ、三月に横浜を出港して翌年七月に帰国する。この欧米視察からの帰国後に平泉は「皇国史観」に転じたとする見解が従来から主張されているが、すでにみたようにそれ以前から国粹主義的思想や時局家的姿勢は認められるので、欧米視察を境にした平泉の変化を重視しない見解もある。しかし、一九三一年六月十一日付けの家族宛書簡に欧州滞在の收穫として「小生一生の任務の今漸く明らかに覚知せられたるを思ひ」とあることからみて、なんらかの転機となったことは確かであり、実際に現象面から見ても帰国後の彼に大きな変化が認められることは動かない。たとえば、帰国後の一九三三年にまとめられた『武士道の復活』には執筆年代順に記すと以下のような文章が収められている。

一九二九年 橋本左内先生とその周囲

一九三二年 月沈原の想出、サボナロラと日蓮

一九三二年 ドイツの歴史教育、橋本景岳、皇室と国民道徳、革命とパーク

一九三三年 武士道の復活、維新の原理、神皇正統記の成立、神皇正統記の内容

このように帰国後の作品をみれば、もはや、かつての卓越した中世史家・平泉澄の面影はなく、時局家・平泉澄が正面にでてきているのは明瞭であり、このことは論文集に収録されなかった作品をみても明らかである。

一九三三年 神皇正統記諸本の研究、思想史、北畠親房の古今集註、關齋先生と日本精神、偉なるかな關齋先生

一九三三年 中世に於ける国体観念、橋本左内と明治維新、山崎闇齋と水戸学、武士道の神髄

ここでは一部学術的論文はあるものの、多くは近世勤王家に題材をとった国粹主義的な文章である。この傾向は一九三四年以降さらに顕著となり、作品の大部分が近世勤王家か建武中興ないし南朝の遺臣にかんするものとなり、東大における彼の講義も、中世史と題しながらフランス革命やフランス伝統主義を扱ったものとなってしまった。したがって、平泉の思想を考えるには、やはりこの欧米視察は避けて通れない間

題と思われる。

彼の欧米視察の行程はほぼ以下のようである。一九三〇年三月二四日に横浜から船出、五月三日にマルセイユに上陸。パリを経て八日にベルリンに入りベルリン大学を尋ねるが得る所はなかったという。その後、ライプツヒでヘルマン、ゲッチンゲンでシュラム、ハイデルベルグでリックケルト、再びベルリンに戻りマイネッケに会い意見をかわし、この間ドイツの教育施設も参観した。十月一日にベルリンからプラハ・ウィーン・ブダペストを経て十四日にアテネ着。二七日にナポリに到着しクロアチェに会う。十一月十三日から十九日はフィレンツェに滞在。二四日からフランスに滞在してフランス革命の研究を行うが、ここで平泉は当初二年の予定であった在外研究の期間を短縮して六月三十日までとし、七月九日には帰国することにした。この予定変更は彼が家族に宛てた一九三一年三月二五日付けの書簡に見え、フランス滞在中に決定されたのである。その後スイス・オランダを経て、四月七日にロンドンに入り、大英博物館に通っておもにフランス革命の研究を行い、五月二七日にはイギリスをはなれ、アメリカを経て七月九日に帰国した。

当然ここで問題となるのが、予定を変更した彼の早期帰国の意味である。この点について平泉は後年『悲劇縦走』のなかで、「世界情勢のただならぬ雲行、不安なる底流、そして

諸外国と比較して我國の甚だしき無防備、是れではいつ何が起るか分らず、起った時にどうして良いのか、判断がつかないのでは無いか、といふ心配が強かった」とか、「大國難の迫りつつあるを予感して、いそいで帰朝し、國民精神の強化、道義の高揚につとめ、とくに陸海軍に忠勇義烈の氣象を喚起しなければならぬ」と考えたとか、また大戦争を迎えた際に自己を確立せざる日本は大混乱に陥るであろうとか、いく通りかの説明を行っている。いずれも晩年の回想であるが、予感される大きな変化を前に國民の愛國心を高揚させようという意図であった点は推測できるであろう。その点を念頭において、しばらく帰国後の彼を追ってみよう。

まず、九月二一日午後六時半より東大國史学科の十一日会例会が平泉の歓迎会として本郷の明治製菓で行われ、彼の「興味深き旅行談」を聞いた(『史学雑誌』42-11)。その時の雰囲気について北山茂夫は「かれ(平泉)は、ヨーロッパにおける愛國主義、ないしその教育の現状について熱弁をふるったが(略)、それにはたいして黒板勝美は例の哄笑をもっていないし、辻善之助は、終始渋い表情を変えず、座は白々しい空気につつまれていたのを感じた」と述べている。その後九月二七日の史学会例会、十一月二四日の歴史地理学会例会で「海外視察談」を述べ、また十月七日の景岳会講演会でも外遊中の見聞に触れ、十一月十六日に有終会でも「國史家と

して欧米を観る」と題して講演している。これらの記録を参考にすれば、欧米視察の平泉にあえた影響をある程度推察することができると思われる。

平泉の欧米視察の目的は、史学会例会の筆記(『史学雑誌』42-11)によれば「国史学は如何に研究し、如何なる方針で歴史教育に当る可きかを視察した」と述べ、歴史学の研究方法と歴史教育のあり方が視察の目的であったという。歴史地理学会例会の筆記(『歴史地理』59-1)では「各国における国史家の態度如何、それぞれの国に於て国史を如何に考ふるか、汎く歴史なるものを如何に考へるかを觀察せられた」と述べ、ほぼ史学会と同様であるが、さらに「現代の我が国を動かすものはマルクスであるが、其の根本はフランス革命にまで溯るものであり、従つてフランス革命は我が国を動かしてゐるものの根本であるから、これも国史家の考究しなければならぬ問題である」と記す。また有終会の講演では、各国の歴史家が自分の国の歴史をいかなる態度で研究し、教育しているかをみるのが留学の目的であったと述べたという。<sup>⑧</sup>

これらをまとめてみると、平泉の欧米視察の目的としてつぎの三点があげられる。まず第一に歴史研究方法の追求がある。すでにみたように時代の精神を追求しようという彼にとつて、その方法論は最重要の課題であつたらう。彼の「その時代特有の性格を明らかにしよう」とする研究法は、ドイツのヘル

マンやシュラム、ハンガリーのエルメールから支持されたという(『悲劇縦走』)。このことは、ヨーロッパ滞在中のある時期までは彼には時代精神的発想による中世史研究を継続する意志があつたことを示している。つぎに歴史教育のあり方がある。これは「史学研究室の性格、その設備」、換言すれば大学における歴史教育・研究、つまり専門教育の方法が主であつたようである(『悲劇縦走』)。この歴史研究と教育については、おもにドイツでの研究者の訪問と意見交換というかたちで追求された。三番目がフランスとイギリスにおけるフランス革命の研究である。これはフランスでは革命そのものを、イギリスではその革命がいかに受け取られたかを追求し、あわせて日本でのフランス革命観を覆し、左翼運動の「根本」を批判しようというのである。そこで彼はフランスでは革命を「後世の書物を読まず、当時の遺物により考へ」とくに革命のスローガン「自由・平等・博愛」は当初から揃つていたのではなく、最初は自由のみで一七九二年に平等が加わり、博愛は一八三〇年以後に加えられたと結論づけた(『史学雑誌』42-11)。この時彼の説に賛意を表明したというフランス革命史の専門家マタイエ(Mathies)とは、綴りやロベスピエール派でフランス革命研究の雑誌を主宰していたなどからみて、『フランス大革命』の著者マチエである。ねづ・まさしが当初一九三三年に企てたその翻訳を結局

中止した(岩波文庫・解説)ころ、自説をマチエに支持された平泉が東大でフランス革命史を講じていたのも皮肉である。だがこれらの研究が彼の早期帰国の原因とは考えがたい。これらには出発当初からの目的であって、予定通り滞在することで研究は一層深化するであろうからである。したがって、彼に早期帰国を促し、アジテーターの方向に大きく傾斜させるきっかけとなったのは、当初の目的には含まれず、しかも彼に大きな衝撃を与えた事柄であったと推定するのが順当である。そこでまず推定されるのが、留学が彼のナシヨナリズムに与えた影響である。史学会例会の筆記の末尾に「従来日本の学者がとかく卑屈で外国の下風に立ち、その模倣に汲々たるが為」に西洋で日本の学者が軽視されていると述べ、「我々は日本独自の精神で独特の研究をせねばならぬ」とあることが参考となろう。

つぎに、ドイツにおける「愛国者」フィヒテの評価や一九三〇年九月五日のギムナジウム・ツーム・グラウエン・クロスターの参観をはじめとする愛国主義的な歴史教育の見聞<sup>⑧</sup>、彼自身がフランス滞在中「貪る如くに読み耽ったものは、実にこのブルジュエであり、又此の人によって教えられたバルザックであり、ル・プレーであり、更にテーヌであり、ボナルドであった」と明言しているブルジュエを通じてのフランスでの伝統主義の確認があげられる。これらは先にみた欧米

視察の目的には当初は含まれておらず、それだけに彼に与えた衝撃は大きかったろう<sup>⑨</sup>。もっともはやい時点での報告である十一日会例会で、彼が「ヨーロッパにおける愛国主義、ないしその教育の現状について熱弁をふるった」というのも、彼がもっとも印象づけられたものがなんであったかを物語っていると思われる。また景岳会の講演会でも彼は「外遊中、独逸国に於て親しく見聞せられた所感を披瀝して、国歩艱難の際に於ける緊切なる要務は、先づ国民精神の發奮に待つべきものなるを縷述して、我が国民の反省を求め」、その反省は「景岳先生の精神を今日に繼承し、其の魂を我等の胸に呼び起すにあ」と述べており<sup>⑩</sup>、その後の彼が近世勤王家を盛んに論じる契機がドイツでの見聞、おそらくはフィヒテや愛国主義的歴史教育にあることを示しているのである。

欧米への出発以前にすでに彼は『神皇正統記』と近世勤王家によって日本の「伝統」を見出していた。ドイツやフランスの愛国者と同様に「伝統」を説き「革命」を否定せねばならぬ。フランス滞在中に彼がかかる使命を感じて早期帰国を決したと推定しても無謀な想像ではなからう。ここにおいて、彼の内部における学究と時局家のきわどいバランスはついに崩れてしまったのである。これ以後、「中世の世界」を追求した歴史家・平泉澄は、時代を通じて変わらない「日本精神」を説き、近世の勤王家や建武中興を顕彰して国民教化を押し

進めるアジテーターとなり、その手段としての考証に歴史家としての資質が動員された。中世史家・平泉澄は愛国教育家・平泉澄に埋没してしまったのである。

かつて平泉は「我が歴史観」において、歴史家は事実を価値関係において選択しなくてはならないとして、歴史家が全体を把握し、その関係から事実を選択することの重要性を説きつつ、「歴史は価値を論ずるけれども決して評価するのではな」く「評価は畢竟するに賞賛するか非難するかの問題であるが、価値に関係せしめることは、賞賛でもなければ非難でもない」と論じた。しかし、帰国後の彼の活動は過去の評価以外の何者でもない。私には平泉のこの変化は、彼が藤原頼長に呈した「人格の上に於ける異常の変化は、前後殆んど別人の観を呈するに至った」<sup>①</sup>という言葉をかりて表現するのが適当なようにも思われる。

それ以降平泉がたどった軌跡は本稿の考察の外である。ただ、いかなる時局評論においても、歴史的考証をほどこすのが平泉の手法であった。さればこそ、一九三六年発行の『万物流転』について、「全篇博士独自の鋭き気魄の溢るるものがあるが、随所に又精緻な考證の盛られてゐることも、見遁してはならない」という評価もうけるのである。<sup>②</sup>このような歴史家としての資質をみれば、あるいは国民教化を押し進めながら、一方で中世の本質を追求することも可能であったよ

うに思われるが、彼はそれをついに再び成さなかった。それはおそらく、時代相の変化を追求することが「革命」史観に力のかすことになるかと判断したからであろう。ここに、「平泉史学」の中世史はついに未完のまま残されることとなったのである。

#### おわりに

本稿では一九三〇年代初頭までの平泉澄を追いながら、その学風の変化について一応の解釈を施してみた。もちろん、問題は本稿で示したような単純な見通しで尽きるものではなく、また、彼の内面を中心としたため、その社会的な要因とくに当時の左翼思想との関係については論じることが出来なかったのを遺憾とする。「はじめに」で述べたように、平泉澄にかんする本格的な研究はまだその緒にいたばかりである。彼の未完の中世史像や、帰国後に彼が学界の内外で繰り広げた政治的、社会的活動など、残された課題は山積している。私自身もさらさらためて考察を深めて、つたない評論の欠を補いたいと思う。

#### 注

① 齊藤孝「異常な風景——平泉澄——」（『昭和史学史ノート』一

九八四年)。

- ② 今谷明 A 「平泉澄の変説について」(『横浜市立大学論叢』40-1、一九八九年)、B 「皇国史観と革命論」(『横浜市立大学論叢』43-1、一九九二年)、C 「平泉澄の皇国史観とアジュール論」(『創造の世界』95、一九九五年)、D 「平泉澄」(『20世紀の歴史家たち』1、一九九七年)。荻部直「歴史家の夢」(『年報・近代日本研究』18、一九九五年)。主要な先行研究はこれらの論考に注記されている。また、井上章一・今谷明・秦郁彦・山折哲雄「シンポジウム・日本歴史学の反省」(『創造の世界』95、先掲)も一部、誤解があるが、興味深い指摘に富む。
- ③ 平泉澄「萩野先生」(『芭蕉の俳』一九五二年)。
- ④ 平泉澄「吉田兼俱の冤罪」(『史学雑誌』31-7、一九二〇年)。伊勢貞丈「三社託宣考」を読んだのがきっかけという。
- ⑤ 村尾次郎「先師平泉澄博士における神道」(『神道史研究』33-3、一九八五年)。
- ⑥ 平泉澄「泰澄和尚伝記考」(下出積与編『白山信仰』一九八五年、一九五三年初出)。なお牧野の写本は蜜谷弥四郎蔵本の写本で、平泉は一九一一年夏に原本を見るため蜜谷家を訪れたが見ることができなかったという。
- ⑦ 森克己「黒板勝美」(『日本古文書学講座』第二巻・月報、一九七九年)。
- ⑧ 北山茂夫「日本近代史学の発展」(旧版『岩波講座・日本歴史』

別巻1、一九六三年)、井上光貞『わたくしの古代史学』(一九七三年)など。

- ⑨ 大久保利謙『日本近代史学事始め』(一九九六年)。
- ⑩ 平泉澄「中世に於ける精神生活」序文(一九二六年)。
- ⑪ 坂本太郎「古代史の道」(一九八〇年)。
- ⑫ 大久保利謙・注⑨著書。
- ⑬ 北山茂夫・注⑧論文。
- ⑭ 大隅和雄「日本の歴史学における「学」」(『中世思想史への構想』一九八四年)、斉藤孝・注①論文、永原慶二「皇国史観」(一九八三年)、今谷明・注②A論文など。
- ⑮ 平泉澄「中世文化の基調」(『国史学の骨髄』一九三二年、一九二九年初出)。
- ⑯ 豊田武「私の歴史研究の足跡」(『豊田武著作集』八・別冊、一九八三年)。
- ⑰ なお平泉は「文化人類学」を読む(『史学雑誌』36-2)で述べるように、文化人には歴史があるが、自然人は文化人の歴史の中に入ってくる事はあっても、それ自体の歴史はもたないと解しており、その点と彼の国民理解との関連は今後の課題であろう。彼が中村吉治に述べたという「百姓に歴史がありますか」という言葉もこれに関連してくるが、この言葉は彼と中村との関係をもふくめて検討する必要があるようにも思われる。
- ⑱ 今谷明・注②A論文。

19 平泉澄「莫逆内山兄を偲ぶ」(内山先生顕彰会『追慕内山進先生』一九九一年、一九三七年初出)。

20 今谷明・注②A論文。なお『悲劇縦走』が引用する意見書の伏せ字の部分には、同書での用例から見て特定の固有名詞とくに人名がはいる可能性がたかく、特定の教師の追放をはかったとみるべきである。

21 今谷明・注②D論文。

22 平泉澄「江都督納言願文集発刊の由来」(『国史学の骨髄』先掲、一九二九年初出)。

23 荻部直・注②論文もこの論文を「平泉史学の転機を画する業績」と位置づけている。

24 山田康彦編『景岳会小史』(一九三五年)。

25 名越時正「平泉先生の日本学といはゆる水戸学」(『神道史研究』33-3、先掲)。

26 近藤啓吾「平泉博士の崎門学」(『神道史研究』33-3、先掲)。

27 大久保利謙・注⑩著書。この時の舎監の経験が、後年平泉が「松陰が門弟を教えたと同じ方法で」(大隅和雄・注⑭論文)学生を教化しようとした姿勢につながるのではなからうか。なお中野重治「むらぎも」に輔仁会の雰囲気的一端が描写されている。

28 平泉は一九三〇年執筆の「日本精神」(『武士道の復活』一九三三年)で、「日本精神」の実体として「忠孝の精神、尚武の気象」を想定しているが、帰国後は武士道にその精華をみるようになる。

一九三三年執筆の「武士道の復活」(『武士道の復活』先掲)や「武士道の神髄」(『日本精神講座』一九三三年)参照。

29 井上光貞・注⑧著書など。また帰国後の平泉の変貌は、当時彼に接した者の実感でもあった。豊田武・注⑩回想など参照。

30 近藤啓吾・注⑭論文。

31 近藤啓吾・注⑭論文。

32 北山茂夫・注⑧論文。

33 名越時正・注⑤論文。

34 平泉澄「ドイツの歴史教育」(『国史学の骨髄』先掲)。

35 平泉澄「フランスに於ける伝統主義」(『伝統』一九四〇年)。

36 平泉はブルジュエとの出会いについて「段々仏蘭西革命に就て考へて居りますうちに、凶らずも非常に愉快なことを見付けました」と述べている(『維新の原理』『武士道の復活』先掲)。

37 山田康彦・注⑭編著。

38 平泉澄「保元平治の乱と平氏」(戦前版『岩波講座・日本歴史』11、一九三四年)。

39 代々木会編『昭和十一年の国史学界』(一九三七年)。

(関西大学非常勤講師